

な衝動を与えた。そして去るに当って「未亡人よ忙しくあれ、仕事に追われて忙しいときは、心的にも、性的にも悩みが解消される。子の母として立派に生きて下さい。」と和崎さん自身の尊い体験から生まれた述懐をのこし、米春必ず秋田にあそびに来る。と駅頭に見送りの多くの人々に挨拶し、昭和二十五年十月十二日の夜秋田を去ったのである。

大阪における生活は平穏であったが、病気は快方に向わなかった。和崎さんと共に、女性解放運動に働いた人々は、和崎さんが兎も角も達者な中に、和崎さんの業績を讃えた記念碑を秋田の地に建てたい。と小泉キクエ、中村政子、菊地タニ、古村キサ子らが発起人となって、この計画をすすめる、建設地は金照寺公園をえらび、揮毫は和崎さんと関係の深い市川房枝女史に依頼し、その除幕式は昭和二十六年十一月十八日現地においてあげられた。碑文は。

秋田女性の母

和崎ハルさん

出生地なる楡山に永久に記念して

一九五一年十一月 市川房枝書

数千言を並べて、拾い読みするに徒らに時間のとれる他に見る多くの碑文よりも、わずか数言で和崎さんの性格と活動を伝えたこの文字が、却って印象的で人の心を打った。市川女史はこの日出席して、自分は筆で文字を書くことがないので、元来ならばお断りするものであるが和崎さんのことであるから、これを引受けて四、五日稽古して書いたのだと語っていた。

和崎さんのこのころの容体は、大阪から秋田まで汽車にゆられて、それから式場に臨むということは、すこぶる無理であったが、秋田を訪れる最後かも知れないから、是非行きたい。と熱心な希望であったので、和崎さんの身上を気遣う人も、これを容れざるを得なかった。そ

して同志の人々に護られて、金照寺山の会場の席についた。

市川氏と共に、婦人参政権獲得期成同盟を組織し、遂にその目的を達成して、婦選第一回の選挙に出馬して、共に当選の喜びを語り合い、婦人代議士の今後の活躍を期待されたが、和崎氏の議会生活はわずか一年の短命であったが、市川氏はすこぶる健康で活動しているに反し、和崎さんは市川氏よりも活動力が寧ろ旺盛であったが、今は病弱の身となって、人手にすがらなければ歩行困難である。記念碑前に、この両者の対面は、劇的に数百名の参列者の涙を誘うのであった。

和崎さんは、自分の記念碑の除幕式に出席し、思い出多い秋田の人々と語り会って、大阪に帰えられた翌年の昭和二十七年十二月三十日六十八才にて、長男嘉之氏宅にて秋田女性の母和崎ハル氏は永眠されたのである。

いるが、文章はよんだことはなかったし著者のあることも知らなかったが、この稿を草するに際し、小泉キクエ氏から「私の歩んだ道」の著書のことをきかされまた雄勝郡稲庭駒形中学校長高橋克衛氏から「不泣のおもかげ」の著書を拝借して一読したが、その文才の豊かであるのにおどろいたのである。口舌の巧みなるものはややもすれば、誠意に欠け、その長所が却って禍いの門となる場合は多いが、和崎さんは女としては稀れなる雄弁で、誠実で、世話好きで、実行力に富んでいた。和崎さんは、女子に生まれたことが、希望を失ったかのようにいわれたが、これは少女時代のことで、長じてもそう思っていたかどうかわからないが和崎さんのような型やぶりの女が生まれてくれたばかりで、当時眠っていた秋田の女を社会的に眼をさましてくれたことであらう。と私は思っている。

(次号は田口省吾)

郷土の誇る

秋田杉

その美しい

空目を活した

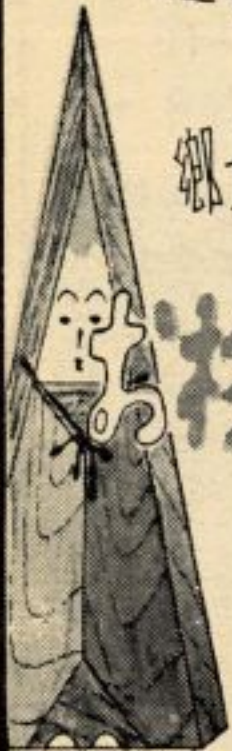
秋田杉花



通産大臣賞に輝く

郷土人形

杉あらげ



大館市・駅前

大館工芸社